



Title	<書評> 佐藤由利子著『日本の留学生政策の評価 人材養成、友好促進、経済効果の視点から』
Author(s)	大西, 好宣
Citation	留学生教育. 2012, 17, p. 161-161
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50999">https://hdl.handle.net/11094/50999</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

佐藤由利子著

## 『日本の留学生政策の評価 人材養成、友好促進、経済効果の視点から』

大西 好宣 (大阪大学)

比較高等教育学の碩学 PG. Altbach によれば、「留学生に関する研究については、(中略) 留学生個人の適応、異文化関係などのミクロレベルの分析が多く、国や組織への影響などマクロレベルの政治経済的観点からの研究が少ない」という(本書3頁)。そのような欠落を補う研究成果として、本書はわが国における嚆矢と言ってもよく、画期的な意味合いを持つ。

著者の佐藤は、東京大学を卒業後、国際協力機構(JICA)での勤務を通して政府間レベルの途上国支援に携わり、その後学界に転じてからは、日本で学ぶ多くの留学生を支援してきたという複線的なキャリアを持つ。本書の核となる、インドネシア及びタイの日本留学生に関する調査とマクロ政策分析は、まさにそのような著者であればこそ成し得た研究であろう。

本書はまず、その構成がよい。誰もが認める留学大国である米国とわが国との経済便益の比較(本書第2章)に始まり、インドネシア及びタイでの著者自身による独自調査(同第3～4章)、国費留学と私費留学の比較(同第5章)、留学生10万人計画前後の時系列比較(同第6章)など、最後に著者の言わんとする結論が素直に腑に落ちるような、理論的かつ緻密な章立てとなっている。

中でも、本書の白眉となるのは第2章であろう。著者はそこで、留学生がわが国にもたらした経済便益の試算方法とその結果を、米国におけるそれと比較する。教育経済学の初歩的な手法ではあるものの、本邦初と言ってもよいこのような試みには素直に拍手を送りたい。ただ、著者自身は経済学の泰斗ではないため、これを契機として、専門家による今後のより精緻な分析を併せて望むものである。

また、著者が考案したという政策評価マトリックス(Policy Evaluation Matrix, PEM)にも、同じく国際協力というフィールドを出身母体とする者として感銘を受けた。PEMとは、「ODAのプロジェクト評価で広く用いられている理論的枠組み(logical framework)の1種であるProject Design Matrix(PDM)を、政策レベルの評価に適用できるよう改良したもの」である(本書15頁)。後者のPDM自体は、国際協力を生業とする人間には日常

的に余りに見慣れたものであるため、それをこのような形で応用するという風にはなかなか考えが及ばない。脱帽である。

第4章では、日本人に対する(留学生の)留学前後の印象変化が紹介されている。著者による調査では、留学前よりも後の方が「日本人が好き」と答える者が増えるなど印象は良くなっており、米国留学組の米国人に対する印象変化と比べても、より好ましい結果になっているという。

「これまで、日本への留学生は、日本嫌いになって去っていくケースが非常に多かった」(『アホ大学のバカ学生 グローバル人材と就活迷子のあいだ』(石渡嶺司、山内太地著 248頁 光文社)など、さしたる根拠もない、自虐的で無責任な流言飛語がいまだに多い中、われわれ留学生教育に関わる者としては非常に勇気づけられる実証研究ではなかろうか。

その反面、ちょっとした注文がなくもない。例えば、「2つの目標を達成してきか(ママ)」(本書14頁)のような初版にありがちな脱字、「予算を減少し」といったような、日本語としてどうかと思うような表現、さらには一部のデータが1990年代初頭のものだったりして、概して古いなどの点がそれである。もちろん、これらは本書の本質的な価値をいささかも減じはしないものの、今後どこかの時点で修正されることを期待したい。

なお、著者は本書の第8章等で、今後の研究課題として米国以外の国との比較、或いはタイ及びインドネシア以外の国における調査を挙げている。調査のフィールドをそのように水平に拡大していく方向性にももちろん異論はないが、他方、経済便益に関するより深い分析を含め、本書で提示された結果をさらに精緻に、或いは異なる視点で追及していくという垂直方向への進み方もあるのではないだろうか。

いずれにしろ、同じくマクロレベルの研究に関心を抱く者として、著者の今後の研究に大いなる期待を寄せるものである。

(東信堂、2010年5月、238頁、税抜3,400円)